

連載 36

冬の生活と方言
〈雪道に作る落とし穴〉



大杉雪まつりで「雪像づくりにチャレンジ」
「さあ、何を作ろっかなー」

1月半ばに15年ぶりの大雪に見舞われた北陸ですが、この雪でかつての冬の生活を思い出された方も多かったのではないのでしょうか。これまでにも連載では冬の生活と結びつけた言葉として、「雪渡り」〈氷柱〉〈雪に足がはまる〉の方言を取り上げたことがあります。今回は〈雪に足がはまる〉との関連が見られる〈雪道に作る落とし穴〉の方言をご紹介します。みたいと思います。

福井の大野ではオチリン

監修者として2年間協力していた、NHK福井放送局「ふるさと日本のことば」記録事業の一環として、昨年2月に、福井県内でも有数の豪雪地帯、大野市の雪に関する言葉取材したことがあります。その中で〈雪道に作る落とし穴〉の方言オチリンを取り上げ、放送ではリポーター役のアナウンサーに落とし穴作りを実演してもらいました。オチリンという愛らしい響きに誘われて、私にとっては30数年ぶりの楽しい落とし穴作りでした。

小松ではオトシアナのほかはウツリコ類が代表形

小松市内の雪道の落とし穴の方言分布を見ると、その語形を知らない人の多い旧小松町域や海岸に近い集落これらの地域ではそういう遊びをしなかったり、しにくかったのでしょう。を除いて、小松バイパスをはさんだ西の平野部と南部地区でオトシアナ、寺井町・辰口町に近い北部から小松バイパスをはさんだ東の地

域でウツリコの類が聞かれました。分布からはオトシアナの方が新しい言い方と思われれます。ウツリコの類は〈雪に足がはまる〉で市内に広く分布の見られたウツリコという動詞形から生まれたものではないでしょうか。ウツリコの類には、ほかにウツリコ(金野・金平)、ウツツコ(上八里・里川・高堂・長田・平面・本江)、さらにウツツンドコ、ウツランコ、ウツリンボ、ウツリアナといった形も聞かれました。また、辰口町に近い鍋谷川の東側でオトシ、オトシコなど、大日川上流部の丸山でオチンコという言い方なども聞かれました。

「落とし穴全般をさすオトシアナは今後も使われていくでしょう。しかし、雪が減り、融雪・除雪対策が進んだ最近では、雪道に落とし穴を作ることも難しくなりました。そうした遊びの消滅とともに、雪道の落とし穴だけをさしたウツリコに代表される方言形も、いずれは忘れ去られる運命にあります。」雪道の落とし穴なんて作ることがないという方、スリル満点の落とし穴作り一度挑戦してみませんか。

連載 37

挨拶の方言―東部地域の挨拶ことば



私らはコンノヒト、ってよく聞くわ〜。尾小屋町で
井山貞子さん(写真左)
橋本百合子さん(写真右)

四月は出会いの季節。春の訪れとともに、学校や会社、そしてさまざまな場所で、新しい出会いの挨拶が交わされます。最近の人は挨拶が下手になったとよく言われますが、人間関係が希薄になっている時代だからこそ、円滑な人間関係を築くための挨拶ことばを大切にしたいものです。

挨拶ことばの世界も確実に共通語化が進んでいます。今月からはしばらく、小松で使われてきた挨拶の方言を取り上げてみたいと思います。今回は、市内東部の郷谷川・大杉谷川流域、特に郷谷川上流

部の、かつて鉾山の町として栄えた尾小屋町の例を代表に、この地域の特徴的な挨拶ことばをご紹介します。挨拶ことばを訪問した時の挨拶は「コンノヒト、コンネなど」

たのでしよう。
感謝の挨拶はイトシゲニ、シヨツシャナーなど多彩

「他家を訪問した時の挨拶」では、尾小屋で「コンノヒト、コンネが聞かれました。年齢の高い人たちが使うもので、例えば、コンネ、ダレカオツカイヤ(この家には誰がいるかい)のように言われます。この家の人(は居るか)の傍線部が「コンノヒト、さらに「人」も省略された形が「コンネ(丸山・大杉本町では「コンニヤ」とも)でしょう。コンネは郷谷川流域では西俣・松岡・沢・金平など、大杉谷川流域では赤瀬より下流部の集落でも聞かれます。尾小屋では、ほかにオルカ、オイデルカ、オイデマスカ(この順に丁寧)も聞かれましたが、オイデルカ、オイデマスカは東部地域ではここだけに聞かれました。この町が鉾山の町として他地域からの人の入り込みが多かったため、金沢・小松などの町部で使われる丁寧な言い方も必要とされ

連載 38 挨拶の方言②—南部地域 挨拶のことば



お店やっとるといろんな人と挨拶して話が出来て楽しいんや。符津町の荒木千代子さん(写真左)と常連の横山敏子さん(写真右)

五月は新緑の季節。あちこちの田んぼでは田植えの風景が見られます。筆者の郷里(福井県武生市)では、夕方田んぼなどで仕事をしている人に、「もうやめて家に帰ろうよ」の気持ちを込めてかける大人たちの挨拶ことばが、オシメナリヤンセでした。「もう仕事を」おしまいなさい」の意の丁寧な表現ですが、子どもころは、オシメアライナリヤンセと聞こえて、なぜ夕方の挨拶に「オシメ(おむつ)を洗いなさい」と言うのか不思議に思っ

たことを覚えていきます。小松市内南部地域、JR栗津駅近くの符津町では、同じような夕方の挨拶をヨアガリ(ユアガリ)シヨールカ、ユアガリヤツ、シマエヤーなどと云うようです。ヨアガリ・ユアガリは「夜あがり」でしょう。今月は、この符津の例を中心に南部地域の挨拶ことばをご紹介します。

客の訪問から送り出しまで

他家を訪問した時の挨拶はコンネ、コンネ オツテカ、コンネサマニ、マイドサンなどが聞かれました。東部地域でも聞かれたコンネの由来は前回すでに触れた通りです。その丁寧な言い方であるコンネサマニ(コンネサマネ、コンニサマニ)は、東部地域では全く聞かれなかったものです。符津以外にも、島津波倉・林・矢田野・二ツ梨・小山田・白山田・額見・月津・矢田などで聞かれました。マイドサンは金沢や小松の町部でも使われる新しい言い方で、符津以外では温泉の町栗津でも聞かれました。

家を訪ねて来た客を迎える挨拶は「オ

連載 39 挨拶の方言③—旧小松町 域の挨拶ことば



「おんましんか」、お隣どうしの大土素子さん(写真左)と二木正子さん、玄関先でついつい話がはずむ。龍助町で。

先月まで2回にわたって、市内東部地区と南部地区の挨拶ことばを見てきました。いずれも、70歳前後の年配の方々に使われる(使われた)ものを中心に取り上げましたので、若い方々にはなじみのないものも多かったかと思いますが、最近のように全国どこでも同じような挨拶ことばが聞かれるような時代には、かえって新鮮に感じられたのではないのでしょうか。3回目の今回は、旧小松町域の挨拶ことばの一端を見ることにします。

町部は新しいことばの受け入れ窓口、発信地

旧小松町域では龍助町の例を中心に紹介します。旧町域が小松市の中心であることから、これまでに見た東部地区、南部地区などの挨拶ことばに比べ新しい言い方が多いように思います。小松での新しいことばの受け入れ窓口、発信地がこの地域であったことを示すものでしょう。

「他家を訪問した時の(玄関先での)挨拶」としてはマイドサン、コンニチワ、そしてオンマシシカが聞かれました。マイドサンは南部地区の符津や栗津でも聞かれましたが、旧町域では盛んに用いられるものです。小松の他家訪問時の挨拶としては比較的新しいものです。金沢では商売関係の訪問時の挨拶ことばとして今も聞かれます。オンマシシカは、オル(居る)に尊敬の敬語助動詞マシシカルと疑問の終助詞カのついたオルマシシカル力がオンマシシカル(園町でオンマシシカル)で、オンマシシカルを経て変化し

メー)ゴサツタカ、家に迎え入れた客に楽に座るように勧める時は、ネマラツシエ、アグチカイテ ラクニシテクレ、アシクズイテ ラクニネマツテなどの言い方がされます。そして、ごちそうになった客は帰る際タエンナ ヨバレテ「ゴツツオサンナツテのようにお礼を言うようです。南部地域のお礼の挨拶ことばには、ほかに、東部地域と同じイトシゲニ、エトシゲニ、ゴツツサマナ、キノドクナなどがありました。東部地域では山間部で聞かれたシヨツシヤナ、シヨシヤノノの類は、この地域ではほとんど聞けませんでしたが、符津町では祝儀の祝いをもたらしたときのお礼の挨拶として、オイワイモロテ アリガトー ショーシナン、ハトが聞かれました。一方、そうした客のお礼に答える家の人の挨拶は、ナーモネーガニヨーコソ キテクサシタ、アイソモネーガニヨー キテクサシタのような言い方です。

以上、今回取り上げたもの以外にもありますが、小松市内南部地域の挨拶ことばの世界の一端をご紹介しました。

たものでしょう。「いらっしやいますか」の意の丁寧な挨拶です。その客を迎える側の挨拶は、ヨー イラシタネ、ヨー オイデタネーです。また、招き入れた客に座布団を勧める時は、コレ シーテトンシ(これ敷いて下さい)のように言うようです。シーテトンシのテトンシは、小松を含む加賀地方北部に分布するテクタイ(くたたい)の意の変種テクタンシが傍線部のクを落としてテタンシ、さらにテトンシに変化したものと考えられています。

客は帰る時に、アリガトー、アンヤト(アンヤットーとも)、タイヘンナ オショパンナリマシテ、テンナ キノドクナ(テナナはタイヘンナの変化)、オジャマシマシタのようにお礼を言います。東部地区などで聞かれたイトシゲニ、シヨシヤ・シヨシナの類は龍助町では聞けませんでしたが、一方、客を送り出す側は、オアイソモネー、アンマリイ、ガニ シェント キノドクナのように言うようです。

こうした多彩な、特色ある挨拶ことばが小松市内でも次第に聞かれなくなるのは、やはり寂しい気がします。

連載
40

挨拶の方言④—日本海沿岸地域の挨拶ことば



「まいどさん」スーパーを営む福井さんとあいさつ交わす松田さん。(安宅町で)

本誌連載コラム、雅樹・クリステイさん(市国際交流員)の「なんじやこりや」の先月号では小松弁が話題になり、中に「ようござったのー」という挨拶ことばが登場していました。「サルは」行く・来る・居る」の尊敬語で、共通語で言えば「いらっしゃる」にあたるものです。石川県内では、白峰村などの白山麓地域と小松市の一部を含む加賀地方南部で、今も高年齢の人たちから聞かれる比較的古いことば

です。筆者も先々月、符津町のゴザツタカを紹介しましたが、ヨー「ゴザツタノー」もまた、来訪者を温かく迎える挨拶ことばです。さて今月は、これまでの東部地域、南部地域、旧小松町域に続いて、日本海沿岸地域の挨拶ことばを安宅町の例を中心に紹介します。

これまでも度々取り上げた「他家訪問時の挨拶」はかつては「コンネ(コンノ) オツカー」と言い、最近では「オルカ(親しい家の場合)」、マイドサン、コンニチワなどと「言うこと」で済んだ。「道などで親しい人と出会った時の挨拶」は「マイドサン」です。久しぶりに出会った場合には、「シサンブリジャンネー、ドーシトッタ、ゲンキカのようにも言うようです。ただし、目上の人や改まった相手には「コンニチワになる」とのことでした。「朝の挨拶」は「オハヨサン、オハヨー」、「夜の挨拶」は「コンバンワ」です。夕方、仕事や仕事帰りの人と出会った時には、「もう仕事を終わりにしましよー」の気持ちを込めた、「オシメーナサツタカ、ハヨコト、シモマツシエネー、モー、ヨカゲー」シモワンガカ、オシマイのよう

な挨拶が聞かれます。「ありがと」にあたる「感謝の挨拶」としては、「アンギヤトー」(アンヤトー)からの変化形が多く、時に「キノドクナ」が、「謝罪の挨拶」は、「カンニンシテ、スンマセン」が聞かれます。

以上、安宅町では、旧町域ほどではありませんが、東部・南部地域に比べると比較的新しい挨拶ことばが使われていることがわかります。

日本海沿岸地域ではほかに、「他家訪問時の挨拶」で「コンノヒト」(長崎・浜佐美本町・草野・日末・佐美)、「コンネ(安宅新・佐美)など、「辞去の挨拶」で「イクワノー、イツクワノー」(日末)、「感謝の挨拶」で「キノドクナ」のほか、「イトシゲニ(浮柳・日末)、「ゴツツオサマナ」(小島・安宅新・佐美)が聞かれ、また、「仕事の人への挨拶」では、長崎・小島で「ヒラガリ、シエンジャカ」(お昼前)、「ヨダガリ、シエンジャカ」(夕方)、草野で「アガラシヤカ、シモアンジャカ」などが聞かれました。

これらの多様な挨拶ことばには、人間関係を大切にしながら生きてきた小松の人たちの心が反映されているのです。

連載
41

〈蛇の抜け殻〉の方言



間近で初めて蛇を見てビックリ!!と言っても博物館の標本だったから怖くなかった? 6年生の清水麻未さん(写真左)と谷美奈代さん。

今年も間もなく暦の上では立秋を迎えようとしています。しかし、まだまだ暑さ厳しいこの時期、草むらや山道、田んぼの畦道などを歩いていて突然出会うことのある蛇。中には蛇なんて怖くないという人もいるでしょうが、たいていの人にとっては出会いたくない生き物の一つでしょう。そんな嫌われ者の蛇の名にも方言(種類の違いを含め)はありますが、小松ではそれほどのバリエーションは聞けません。ところが市内全域の調査で、予想外に面白い方言形と分布が見えてきたの

が、その蛇が脱皮したあとに残される「蛇の抜け殻」の方言でした。今月はそれをご紹介することにします。

〈蛇の抜け殻〉は蛇が脱いだ着物です

小松市内で聞かれた「蛇の抜け殻」の方言の代表的な二つの形は「キン」と「ケン」です。筆者の郷里福井県では聞いたことがありませんでしたので、小松で初めて「キン」や「ケン」を耳にした時は珍しい形だと思いましたが、すぐにその方言形の由来に気づきました。「キン」は着物・衣服を意味する「衣」からの変化だということです。「ケン、ケン」のほかに「キヌ」が数地点(中海・岩瀬・西保・本江・蓮代寺)で聞かれること、「蛇のキン脱いだ」と「蛇がケン脱いだ」のような言い方がされることも、この考え方の妥当性の高さを示すものです。小松の人たちは「蛇の抜け殻」を「蛇の脱いだ着物」キヌに見立てたのです。

〈蛇の抜け殻〉を財布に入れるとお金が貯まる

キヌから変化した「キン」は小松旧町域を

含む市北部(津上川・鍋谷川・梯川流域)と東部の山間地(郷谷川・大杉谷川上流域)に分布し、それ以外の地域には「キン」からさらに変化した形「ケン」がまわって分布しています。

琉球方言地域では「衣」から変化した「キン、チン」などが着物・衣服をさす方言形として用いられますが、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松を含む石川県のほか、山形、新潟、富山、岐阜、岡山県などで「キヌ、キン、ケン」が「蛇の抜け殻」を指すようです。

福井でも言われますが、小松でも「蛇の抜け殻」を財布に入れておくとお金が貯まると言われることがあるようです。あの光沢がお金を連想させるためでしょう。また、「キヌ」から変化したはずの「キン」が「金」を連想させるためか、「キン」の分布域の一部地点(千代・安宅・小島)では「キン」(「銀」の意)という形まで聞かれました。方言の世界ならではの自由で豊かな発想が生んだ方言形と言えるでしょう。

連載 42
〈桑の実〉の方言



小さいころは、向かいの山に桑畑がいっぱいあった。今は、もう少なくなってしまつて…。春に赤い実をつける。熟れるとおやつがわりに食べたもんや。口のまわりが赤くなるほど食べたなあー。中出寛さん（大杉町で）

五箇山ごかやまの合掌造り民家の構造にも見られるように、以前は北陸地方でも各地で盛んに養蚕が行われていました。筆者が子どものころ、実家（福井県武生市たけふ）には養蚕の道具がまだ残っていましたし、蚕を飼うために植えられていた桑の木も村の所々にまだその姿を見ることができました。

夏に熟した〈桑の実〉は子どものおやつ

その桑の木には、夏になると青黒く熟

した〈桑の実〉がなりました。今のよう
に市販のお菓子などあまりなかった時代、
〈桑の実〉は子どもたちのおいしいおや
つだったのです。記録的な猛暑だった今年
の夏も終わろうとしています。筆者に
とって甘く熟したツバメ（筆者の方言で
はこう呼んでいました）の味は、昔懐かし
い夏の思い出の一つでもあります。今月は
その〈桑の実〉の方言をご紹介します。今月
と思います。

小松ではツバメとツバミが多数派

市内の広い範囲にツバメ、ツバミが分
布します。かなりの地点で両形が聞かれ、
どちらが古い形かはよくわかりません。
中心部の旧小松町域とそれに続く北部地
域にツバメのみの分布が多いことから、一
見ツバミが古いようにも思われますが、
語末のメとミの違いだけです。ツバ
メが古く、ツバミがその変化形（例えばメ
から「実」を連想するなどして）として生
じた可能性も否定できません。

ツバメ、ツバミの類には、ほかに大杉谷
川中上流部でチーマメ（大杉本町）、ツマメ

（大杉中町）、ツマミ（大杉中町・赤瀬・上
り江）、チマミ（上り江）が、また加賀市に
近い額見・月津でツボミ（ツバミが「蕾」の
発音に引かれて変化したものか）が聞か
れました。大杉谷川流域ではツバメ、ツバ
ミがツマメ、ツマミに、さらにツマミがチ
マミに、ツマメがチーマメに変化したも
のでしょう。

ほかにクワノミという形も全域に点々
と分布しますし、クワイイゴ（松岡・金
野）、珍しいところでカッポー（林）とい
う形も聞かれました。
民俗学者柳田国男の「桑の実」（『西は
どっち』所収 昭23）や『日本方言大辞典』小
学館などによれば、全国には実に多くの
〈桑の実〉の方言が存在しています。養蚕
とともに桑の木が身近になり、各地で子
どもたちが〈桑の実〉に自由な名付けをし
た結果でしょう。中でもツバメ、ツバミの
ように三音節で語頭がツで始まる形は福
井県三方郡以北の北陸地方と岐阜県に見
られるものです。

連載 43
再び〈肩車〉の方言



パパの肩車、
ほら高いゾー、高いゾォー
優太朗さんと
藤井勝司さん（今江町）

さわやかな季節を迎え、秋の行楽の計
画を立てている家庭も多いのではないで
しょうか。行楽地ではよく親に肩車され
た子どもを見かけることがあります。父
親の首に肩車して高い位置からつれしそ
うに周りを見回す子どもの姿は、幸せそ
うな家族の姿そのものです。以前、本連載
の2回目（98年5月）でその〈肩車〉の方言
をご紹介しますが、当時は市内東部32
地点の調査しか終了していませんでした
ので、今回はそれ以降の調査結果も含め、
市内全域の〈肩車〉の方言分布をあらため
てご紹介してみたいと思います。

1・5地点に一つの割で異なる方言形
が！

以前にも書きましたが、全国的に見て
北陸地方はなぜか〈肩車〉の方言の種類
が非常に多い地域です。これまでに市内
約110地点での調査を終えましたが、
ちよつとした発音の違いも含め、これま
で何と74種類もの方言形を聞くことがで
きました。単純計算では約1・5地点に一
つの割で異なる言い方に出会ったことにな
ります。

紙幅の関係でここでは、70種余りの方
言形のごく一部しか挙げることはできま
せんが、形態的特徴（形の類似性）から、そ
れらはいくつかのグループに分けられま
す。

分布の広いものでは、チョンノクビ類
（チョンノクビ、チョンノコビ、チョンコ
ビ、オチョンノコビなど）が東部の大日川上
流域と郷谷川流域、北部の湊上川・鍋谷
川流域、根上町に近い梯川流域の一部に、
サルー系のサルマワシ類（サルマワシ、サ
ルマカ、サンマカ、サルマタなど）が大杉

谷川中・下流域、北国街道沿いの加賀市に
近い市西南部に、同じサルー系のサルコ
ボンボ類（サルコボンボ、サルボンボ、サ
ンカボンボ、サツサボンボなど）が大杉谷
川上流域、旧小松町域とその近辺に見ら
れます。連載2回目でも述べたように、分
布から見て「稚児の首」に由来するらし
いチョンノクビ類の方が、大道芸の「猿回
し」に由来するサルマワシ類・サルコボン
ボ類よりも古い分布と考えられます。特
に旧小松町域にまとまった分布を見せる
サルコボンボは金沢方面の影響を受けた
新しい形と思われる。

ほかには、アバー・アンマーの類（アバツ
チヨ、アバタ、アンマタカ、アブラカイな
ど）が小松バイパス沿いの一部（北の大
野・花坂付近と南の那谷・滝ヶ原付近）、ハ
ツンマが日本海沿岸部、サントメント・サ
ンドメントの類が小松バイパス沿いの西
南部地域などに見えます。

全部の方言形をご紹介しますのは残
念ですが、〈肩車〉が子どもたちの世界のことば
であることが、多くの方言形を生んだ理由
の一つであることは間違いないでしょう。